

佛教大学図書館所蔵「北野宮寺大工職関係文書」について

貝 英 幸

〔抄 録〕

佛教大学図書館に所蔵される「北野宮寺大工職関係文書」の紹介。本史料は、天文年間（一五三二）から慶長年間（一五九六）にかけての古文書一〇点を成巻している。収録される文書の多くは、北野社を中心に寺社大工職に係る史料であり、その全てが未紹介の史料である。また、文書の一部は『北野天満宮文

書』（北野天満宮所蔵）と関連する内容のものも含まれており、室町戦国期から織豊政権期にかけての寺社大工の存在形態を知ることができる。

キーワード 北野社、禁裏大工職、弁慶、神森氏、木子氏、

はじめに

ここに紹介する「北野宮寺大工職関係文書」は、その名が示すように室町後期の北野社大工職に係る文書で、現在は佛教大学付属図書館に所蔵される。本史料は、市井の古書舗にていわゆる待買文書であったものを佛教大学文学部（現歴史学部）が購入し、翌二〇〇七年一月付で同付属図書館に受け入れられた。

本史料伝来の経緯については、待買文書という性格上、購入に際し書舗よりもたらされる情報以外詳らかでないのが本来であるが、偶々

筆者は、本史料が待買文書となる以前、本史料に遭遇する機会を得ていた。

本史料は、待買文書となる以前、京都府宮津市在住の個人所蔵にかかる史料であったが、その際史料の内容について相談をうけたのである。その時の相談とは、将来個人で展示施設を開設したく、については本史料が該施設で展示するのにふさわしいか否かについて意見を求められたものであったが、史料全体の状況が不明であったことに加え、筆者がそうした立場にあるわけでもなく、また要求に応えられるだけの見識も持ち合わせていないことから、文書の釈文および簡単な解説

をお渡しすることでお許しいただいたように記憶している。

ただし、相談にあたり持参されたのが史料の複写であつたことから、改めて史料実物の調査と写真撮影をお願いした。しかし、その後所蔵者とは連絡がとれなくなり、史料の行方も不明となつた。やがて二〇〇六年、本史料が『思文閣古書目録』一九九号に「北野宮寺大工職関係文書」として掲載されていたことにより、本史料が待買文書となつたことを知るに至り、これまでの経緯や事情、史料の性格を考慮し、本学文学部に購入を依頼したところである。

以下、本史料について述べていくこととする。

形態

本史料は、以下目録に示すごとく、全十点の文書が一卷に成巻されており、形状は卷子装である。表紙布地は黄褐色の絹地で、表紙布地と同系色の掛紐が附されている。表紙布地については、卷子天地および掛紐が接する部分を中心に摩耗が見られるものの、虫損や紙継のはがれなどはなく、全体の保存状態は概ね良好である。外題はない。

法量は、総丈竪二七・二糎、横五六一・〇糎。竪については卷子より大きな文書は天地を裁たれ、横は文書が隔水なく貼り継がれている。なお、三号文書「大館」常興・（細川）高久連署書状」は本紙・礼紙の二紙にわたり書き継がれた書状であるが、礼紙は白紙部分が裁たれ礼紙書の部分のみが残されているのみである。

成巻の時期は不明であるが、次に示す二つの点はその時期を考える上で参考になると思われる。

まず一つには、本史料表紙見返し部分には押紙が貼られており、そこには

諸国堂社数廿八卷之内第十八卷 禁裏御大工木子職神森若狹守
北野御社大工職御下智^て状八通 神森出雲守従五位下武繼讓状

とある。この記述をそのまま信用するならば、本史料は禁裏大工の神森氏に伝来した大工職の由緒を示す史料群のなかの一ということになるが、後述するように、十号文書「神森国繼讓状」が相当後の時代の作成であることを考慮すれば、上記押紙の記述は信用することはできない。

次いで、収録文書は年代順に配列されておらず、加えて、四号文書の奥端裏には「十二」の文字が、また九号文書の奥端裏には「七」の文字がみられる。これは本史料に収録されるそれぞれの文書が、成巻以前は別の配列・形態で保管されていたことを示しているよう。また、収録文書のなかには宛所を欠くものがあるが（四号・五号文書）、これは成巻に際して偶々宛所が欠落したようなものではなく、あえて宛所を記さなかったと思われる。おそらく収録文書全体の内容と符号しない宛所であつたのであろう。こうした特徴から考えれば、本史料はとある史料群のなかから特定の目的に沿う内容の文書を選び取り案文を加えた上で成巻したと考えるのがとも合理的な理解である。そしてその目的とは、史料全体から考えれば、本史料最末尾の文書である十号文書「神森国繼讓状」を証明することと推察されよう。この点については、収録文書の多くが卷子の天地に合わせて文書の天地を裁たれたり、天地に余白を残した状態であるのに対し、十号文書だけ

は文書の天地と卷子の天地が符合していることが何よりの証左である
と考える。とはいえ、十号文書の作成時期が明確とはならない以上、
本史料成立の時期については、その特徴を指摘し、本史料成巻の時期
は、十号文書の作成と同時にするとどめておきたい。

収録文書とその内容

次にそれぞれの史料について検討する。

本史料に収録される文書は以下の通りである。

番号	年代	文書名	形状	法量(縦×横)	
1	年未詳六月廿日	前田玄以書状	折紙	縦二七・〇糎	横四四・〇糎
2	年未詳四月晦日	芳桂書状		縦二六・〇糎	横四〇・二糎
3-1	年未詳七月三十日	(大館)常興・(細川)高久 連署書状		縦二五・七糎	横四一・四糎
3-2		同 礼紙		縦二五・七糎	横二六・〇糎
4	永禄二年十一月二十三日	室町幕府奉行人連署奉書案		縦二七・一糎	横四〇・五糎
5	永禄四年十月十九日	室町幕府奉行人連署奉書案		縦二七・二糎	横四一・二糎
6	永禄六年九月十二日	曼殊院覚恕法親王袖判令旨案		縦二七・一糎	横四一・七糎
7	天文十九年十二月五日	石成友通書状案	折紙	縦二七・一糎	横四二・八糎
8	慶長十五年八月十八日	脇坂安治判物	折紙	縦二七・二糎	横五二・二糎
9	天文十七年十二月三十日	室町幕府奉行人連署奉書案	折紙	縦二七・〇糎	横四一・六糎
10-1	天文十八年二月十七日	神森国継讓状写 第一紙		縦二七・二糎	横四一・二糎
10-2		同 第二紙		縦二七・二糎	横三四・四糎
10-3		同 第三紙		縦二七・二糎	横二二・一糎

一、前田玄以書状

前田玄以が「柳監物(直盛)」に対し、水屋の樋について、大工とし
て木子新五郎を遣わしたことを報じたもの。発給年は未詳なもの、
「柳監物・前田玄以は共に文禄三年(二五九四)春に伏見城の工事を分
担しており、あるいはその際のものかと考えられる。

二、芳桂書状

当院棟梁職が天文九年(二五四〇)に与一から源四郎に譲与されたこ
とを証明した書状。文書中にみえる当院については不
明である。

三、(大館)常興・(細川)高久連署書状

大工職相論に関し、相論が幕府・朝廷の両者に関わ
る問題であることから十分に配慮する必要があること
もに、要請のあった人数を明後日に派遣することを記
した文書。発給者の常興は大館尚氏、高久は細川高久
と推定される。両者共に幕府内談衆であるが、活動時
期が重なるのは天文年間であり、本文書の発給もその
時期と考えられる。

四、室町幕府奉行人連署奉書案

北野宮寺の大工職に関して、父棟梁弁慶次郎左衛門
宗安が万松院(足利義輝)の安堵を受けていたにも関

わらず、幕府に無断で大工職の半分を別人に与えたため、大工職は全て新五郎が知行することを命じた内容。宛所を欠く。本文書の発給に關しては、本文書より一ヶ月後の永禄二年十二月二十三日に「室町幕府奉行人連署奉書」が発給されており（『北野天満宮史料』（古文書編）一一〇号）、ここでは「爰番匠新左衛門歎申之子細在之」という事態へと発展したことが知られる。新五郎と新左衛門による北野大工職を巡る相論についてはこの後も継続したようで、五、六号文書も関連する史料である。

五、室町幕府奉行人連署奉書案

番匠新左衛門と（弁慶）新五郎とによる北野大工職の相論に關し、事の糾明が行われ、私的な和与は、後に幕府の裁許を得る必要があること、加えて造営が行われていない、という二つの理由から認められないものであり、大工職を新五郎が勤めるよう命じた内容。宛所を欠く。新五郎と新左衛門との相論は、四号文書において、新五郎の父弁慶次郎左衛門の私的な関係に基づく大工職半分の譲渡を幕府が破棄し、その全てを新五郎が継承するよう命じたことにはじまっている。新左衛門は、弁慶が私的に大工職半分を譲り渡した当事者とも考えられる。

六、曼殊院門跡覚想法親王令旨案

北野大工職をめぐる宗久（新五郎）と新左衛門との相論について、新左衛門の行為を非分之儀として退け、改めて新五郎の理を認め大工職継承を安堵した内容。四・五号文書における幕府の裁許をうける形で

発給されたと思われる。本文書が、大工職相論について、幕府による裁許だけでなく、北野社自身の判断を明らかにした点で注目できる。また北野社内においては、大工職の補任権は北野社別当である竹内門跡（曼殊院門跡）にあったことを示している。

七、石成友通書状案

弁慶次郎左衛門について照会を受けた友通が、自分は存じない旨を述べ、小畠方へ相談する方が良いことを伝えた内容。石成友通は、三好長慶・義継父子に仕え永禄八年（一五六五）には松永久秀と共に將軍足利義輝暗殺に関わったことが知られるが、本文書は友通書状としては相当早期のものといえ、友通のそれ以前の活動の一端を示す史料といえる。

八、脇坂安治判物

慶長十五年（一六一〇）、当時の讃岐国大洲藩主脇坂安治が、各務（かがみ）少五郎に同国浮穴郡・喜多郡内の知行を認めたもの。文書中に見える中野河村・知清村はいずれも大洲藩領。脇坂安治が大洲藩に入部するのは慶長十四年であることから、本文書の発給が脇坂安治の治封に係るものであることがわかる。また、文末にある「当納より大工可有知行」との文言から、この知行地の拝領は、藩内の大工を支配することへの給付として行われたことがわかる。

九、室町幕府奉行人連署奉書案

室町幕府が北野社祠官松梅院に対し、同社大工職弁慶次郎左衛門への御供・給恩が滞っていることを指摘し、速やかに下行することを命じたもの。文書中に見える弁慶次郎左衛門は、四号文書以下の大工職相論の当事者と同一人物と思われる。

十、神森国継譲状写

三紙からなる文書で、最初に禁裏・加茂社・出雲大社・北野社・光明寺殿（九条道家か）など、大工職に補任されていた社寺を記し、次いで北白川・西京・加茂・北八条村・東山内野・九条村など、大工職に付随する形で給付された所領が記されている。文書に記された年代は天文十九年であるが、紙質・文字・地名の表記などから考えると、相当後に記されたものと推定される。

おわりに

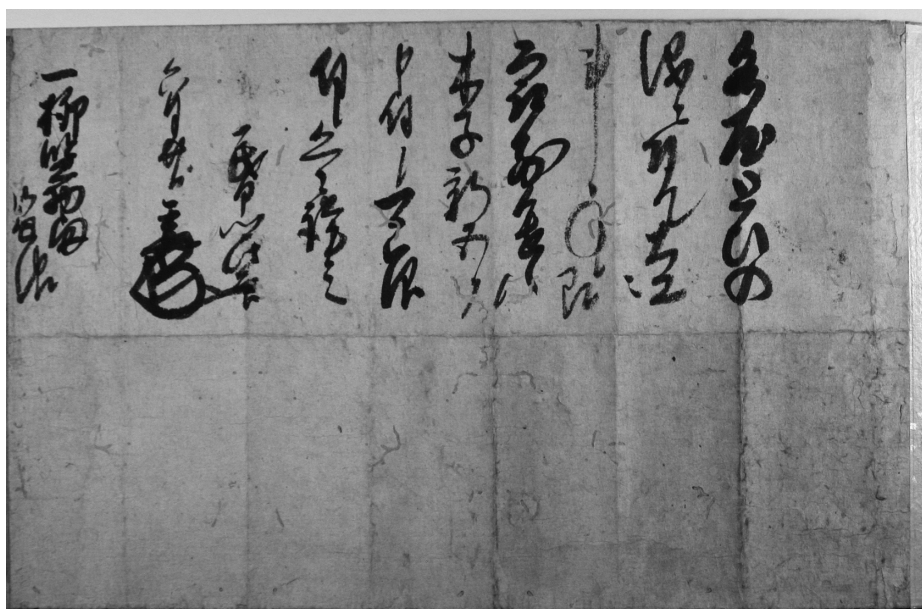
上記の検討によって明らかのように、本史料は「北野宮寺大工職関係文書」とあるものの、実際には大工職神森氏が自らの由緒を主張するために作成した文書と考えるべきであろう。もちろん文書のなかには、現在北野天満宮に所蔵される「北野天満宮文書」と関連する内容の文書も含まれてはいるが、それら文書はいずれも案文として収められるのみであり、いわゆる北野社関係文書、すなわち北野天満宮所蔵「北野天満宮文書」、あるいは筑波大学所蔵「北野神社関係文書」の一部とは考えづらい。むしろ本史料は、神森氏が室町戦国期において

北野社大工職に補任された弁慶に關係する文書類を用いながら、近世以降禁裏大工職として知られる木子家の系譜に自らを位置づけようとするなかで成立した史料と考えるべきであろう。こうした点からいえば、本史料の歴史的な価値は、単に室町戦国期から織豊政権期の文書が収められているというだけでなく、近世職人の由緒・系譜についての主張を知ることができる点に見いだせるのではないだろうか。

なお、北野社大工職および大工弁慶に関しては、桜井英治「一六世紀京都の職人組織」（『歴史学研究』五七九号、一九八八年）および同「中世職人の経営独占とその解体」（同『日本中世の経済構造』第一章、一九九六年、岩波書店）が、また禁裏大工木子氏については栗本康代・植松清志・岩間香・谷直樹「禁裏修理職大工の木子家 寛政度内裏に関する研究（三）」（『日本建築学会計画系論文集』第七五巻第六五二号、二〇一〇年）が詳しい。また本史料についての目録は、山田雄司『北野天満宮旧蔵文書・古記録の目録作成および研究』（平成一六〜一八年科学研究費補助金研究成果報告書、二〇〇七年）にも収められている。

（かい ひでゆき 歴史学科）

二〇一〇年十月十二日受理



一、前田玄以書状（折紙）

水屋とひの

儀ニ付て、大工之

事承候、雖

最前遣候、

木子新五郎

申付候、可被仰

付候、恐々謹言、

民部卿法印

六月廿日

玄以（花押）

一柳監物殿

御返報



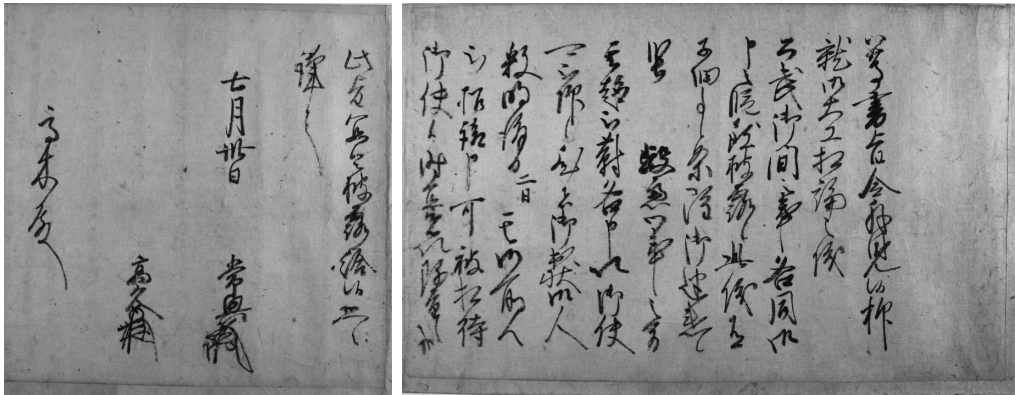
二、芳桂書状

就当院棟梁職之儀、
 預御状候、委曲拝見候、
 先刻如申候、天文九年二
 与一讓与源四郎之儀無紛候、
 即召使事候、御家門へ
 可然様御披露專一候、恐々
 謹言、

四月晦日 芳桂（花押）

内田左京亮殿

御返報



三、（大館）常興・（細川）高久連署書状

尊書旨令拜見候、抑

就御大工相論之儀

公武御間之事、各同御

申之段致披露候、此儀有

子細事候条、雖御迷惑候、

堅 叡慮御事之間、

其趣被对各申以御使

可被仰候、然者、御書状御人

数明後日二日、其御前へ

被招請申、可被相待

御使候、時宜先以珍重候哉、

此旨宜御披露給候、恐々

謹言、

七月卅日
（大館）常興（花押）

（細川）高久（花押）

高木殿



四、室町幕府奉行人連署奉書案

北野宮寺大工職事、父棟梁弁慶次郎

左衛門宗安以相談之旨、萬松院殿御代

被仰付之、帶厳重御下知之処、不經公儀、

為宗安私大工職半分令約諾別人云々、

事実者以外次第也、所詮早任先年御成敗旨、

彼大工職一円新五郎永可令存知之由、所被

仰下也、仍下知如件、

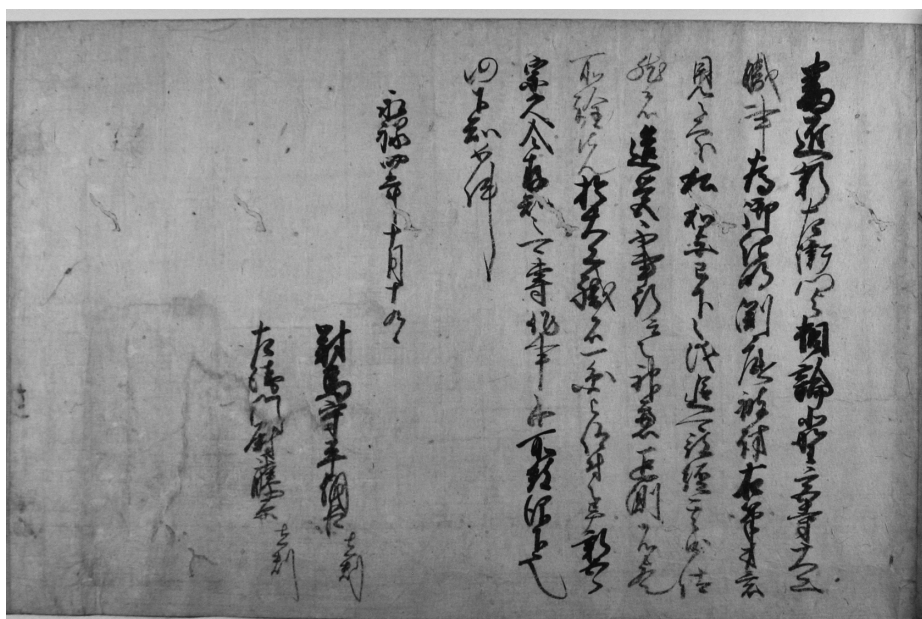
永禄元年十一月廿三日

(松田盛秀)

對馬守平朝臣 在判

(中沢光俊)

備前守源朝臣 在判



五、室町幕府奉行人連署奉書案

番匠新左衛門与相論北野宮寺大工

職事、為御糺明淵底被尋、右筆方意

見候処、私和与已下之儀、追可被経其沙汰、

然者造営不事行云々、神慮叵測者歟、

所詮先大工職者一円被仰付之早、新五郎

宗久令存知之、可專作事由、所被仰下也、

仍下知如件、

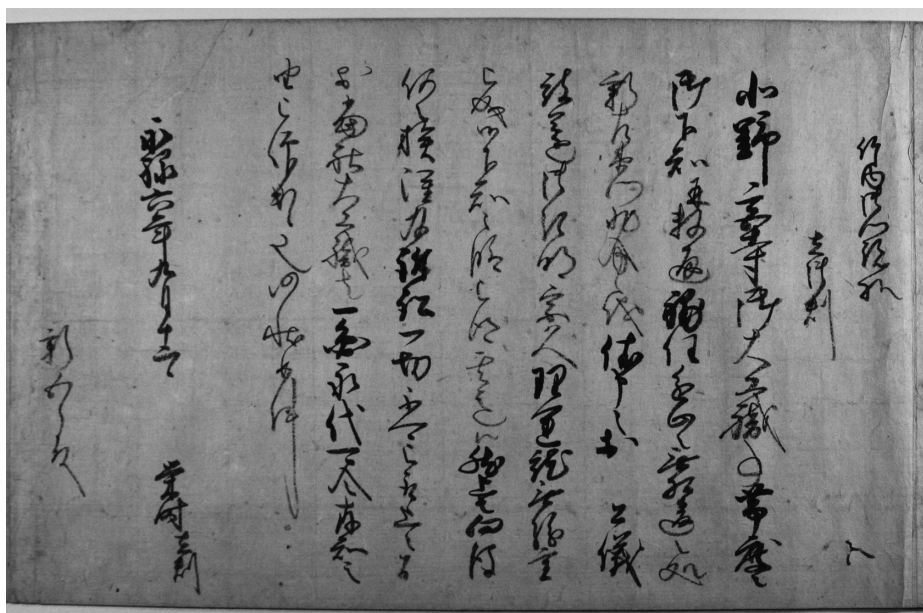
永禄四年十月十九日

（松田盛秀）

对馬守平朝臣 在判

（松田頼恵）

左衛門尉藤原 在判



六、曼殊院門跡(覚恕)御教書案

竹内御門跡様

在御判

北野宮寺御大工職事、帶度々

御下知并数通触、任進止之、無相違之处、

新左衛門非分之儀依申之、於 公儀

被遂御糺明、宗久理運就無紛、重

被成御下知之段、被得其意候、然上者向後

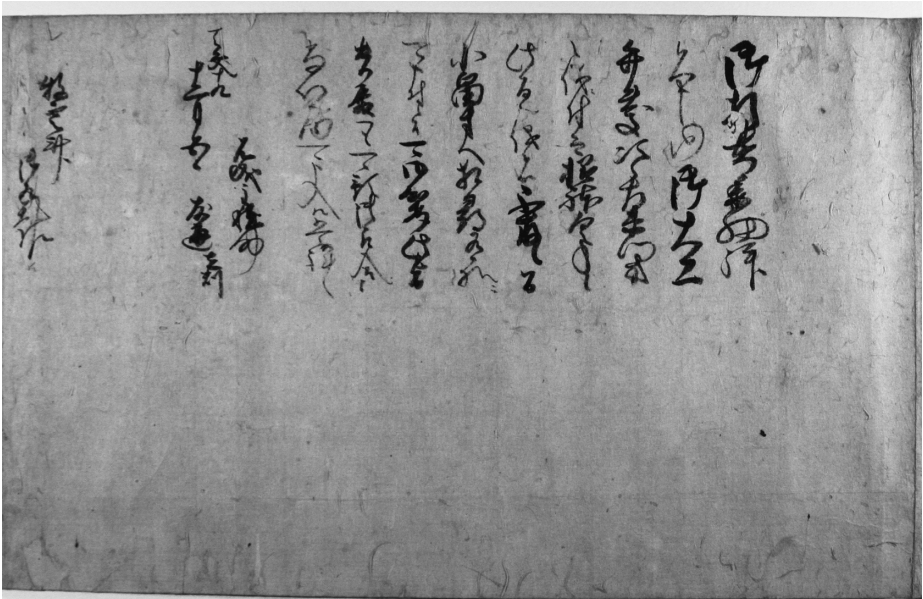
何之族雖及訴訟、一切不可被取上之間、

於当社大工職者、一円永代可令存知之

由、被仰出候也、仍状如件、

永祿六年九月十二日 榮時在判

新五郎殿



七、石成友通書状案（折紙）

御折帋委細拝

見申候、仍御大工

弁慶次郎左衛門方

之儀二付而、様体具承候、

此通儀者不存候間、

小畠方へ相尋、有様二

可申付候間、可御心安、此旨

貴殿へも可預御召合候、

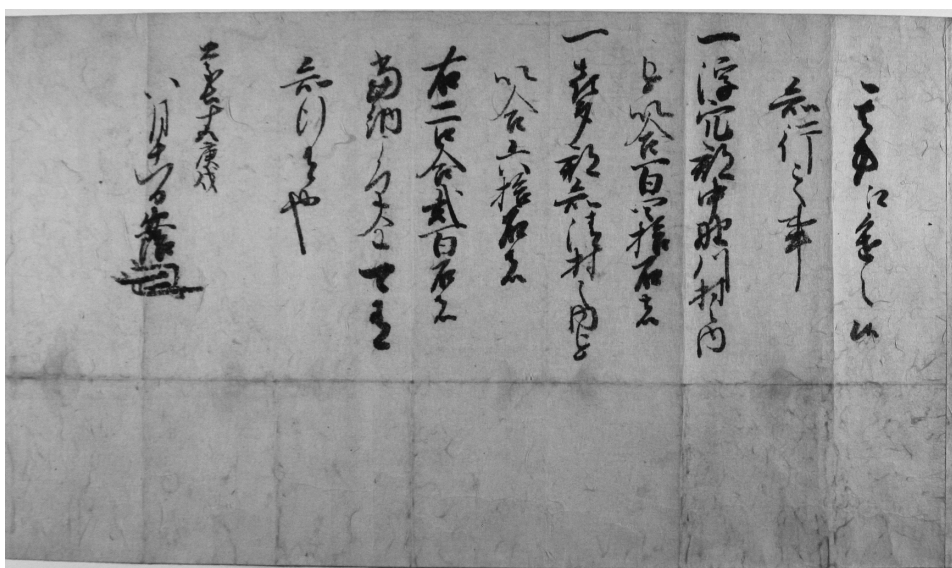
尚以委細可申入候、恐々謹言、

天文十九 石成主税助

十二月五日 友通 在判

牧雲斎

御返報



八、脇坂安治安堵状

其方江遣之候

知行之事

一浮穴郡中野川村之内

迄以合百四十石者

一喜多郡知清村之内迄

以合六拾石者

右二口合式百石者

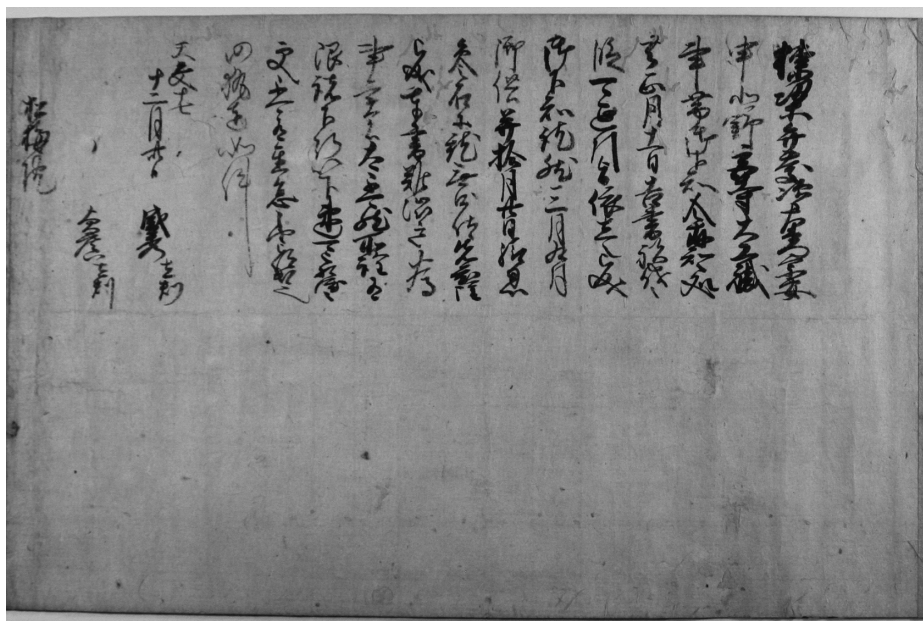
当納より大工可有

知行者也

慶長十五年庚戌

八月十八日 (脇坂) 安治 (花押)

各務少五郎殿



九、室町幕府奉行人連署奉書案（折紙）

棟梁弁慶次郎左衛門宗安

申、北野宮寺大工職

事、帶御下知令存知候処、

去正月十一日吉書祝儀之

段、可延引旨依在之、被成

御下知訖、然三月九日

御供并拾月廿日給恩

参石等就無沙汰候、先度雖

被成奉書難渋云々、為

事实者太不可然、所詮有

限諸下行以下、速可被相渡候、

更不可有遲怠之由被仰出候也、

仍執達如件、

天文十七

十二月卅日

（松田）
盛秀 在判

（飯尾）

貞広 在判

松梅院

讓狀之事

一 禁裏御大工木子職 御繪旨六道
并地間文書宮諸所諸分五通
一加茂之御社御大工職社家文書
并御下知狀

一 出雲國大社大工職 并御下知狀

一 北野御社大工職 并竹内御門跡

并松梅院付社家不殘書文數通

一 光明寺殿御大工職 併不諸分書

一 大工職之家付之諸通事々々

一 在所ハ東ハ京極、南ハ三条之坊門、西ハ

富小路、北ハ姉小路也、此内之屋敷於ハ

諸役御免許

一 御領内北白川村畠三十ヶ所

一 同西京村二而畠八ヶ所、右ハ北野御社之

御新始之領、毎年正月十一日、同三十間家、

一〇、神森國繼讓狀写

讓狀之事

一 禁裏御大工木子職 御繪旨六通

并地間文書宮諸所諸分五通、

一加茂之御社御大工職社家文書

并御下知狀、

一出雲國大社大工職并御下知狀、

一 北野御社大工職并竹内御門跡

并松梅院付社家不殘書文數通、

一 光明寺殿御大工職諸処諸分書、

一 大工職之家付之諸通事々々、

一 在所ハ東ハ京極、南ハ三条之坊門、西ハ

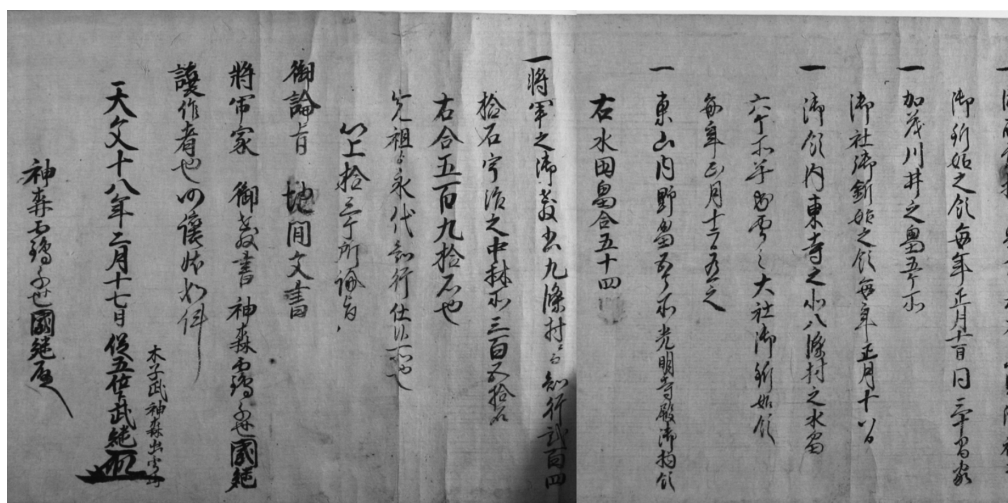
富小路、北ハ姉小路也、此内之屋敷於ハ

諸役御免許、

一 御領内北白川村畠三十ヶ所、

一 同西京村二而畠八ヶ所、右ハ北野御社之

御新始之領、毎年正月十一日、同三十間家、



一 加茂川井之畠御ヶ所、

御社御新始之領、毎年正月十八日、

一 御領内東寺之北八条村之水畠

六ヶ所并出雲之大社御新始領、

毎年正月十二日有之、

一 東山内野畠五ヶ所、光明寺殿御拝領

右水田畠合五十四〔抹消〕

一 將軍之御教書九条村二而知行式百四

拾石、宇治之中林所三百五拾石、

右合五百九拾石也、

先祖方永代知行仕候所也、

以上拾三ヶ所繪旨、

御繪旨 地間文書

將軍家 御教書、神森鶴千世国継

讓候者也、仍讓狀如件、

天文十八年二月十七日 木子氏神森出雲守

從五位下武繼（花押）

神森鶴千世国継殿へ